

## 英雄のいない国

かつて、社会心理学者エーリッヒ・フロムが、その著書、『自由からの逃走』の中で、次の主旨のことを述べています。

第二次世界大戦前、  
民主的なワイマール憲法の下にあったドイツにおいて、  
ファシズムが圧倒的な勢力となったのは、  
ファシズムの巧妙さが、本当の原因ではない。

その本当の原因は、  
多くの人々の心の奥深くに、  
自由に伴う責任の重さから逃れたいとの無意識があり、  
その責任を肩代わりしてくれる  
強力なリーダーを求める社会心理が生まれたからだ。

このフロムの指摘は、それから60年余の歳月を経ても、決して古くならない警鐘として、耳に響いてきます。

### 「新たなリーダーへの期待と幻滅」

その言葉によって形容される  
近年の我が国の姿を見ると、  
改めて、フロムの警句が、心に浮かびます。

### 「自分以外の誰かが、この国を変えてくれる」

その「依存の意識」から脱し、  
我々の精神が成熟を遂げていかないかぎり、  
我々は、いつも、  
強力なリーダーを求め続けるのでしょうか。

そのことを思うとき、  
プレヒトの戯曲、『ガリレイの生涯』の中で、  
「英雄のいない国は不幸だ」との言葉に対して、  
ガリレイが語った言葉を、思い出します。

そうではない。  
英雄を必要とする国が不幸なのだ。